

本日は、教会創立 138 周年記念・永眠者記念礼拝をご遺族の皆様と共にささげる予定でしたが、緊急事態宣言が出たために会堂での礼拝はできなくなりました。しかし、私たちはイエス・キリストによって共に祈り、共にみ言葉に聴くことができます。そして、ともに賛美することができます。姫路市南新在家という場所に教会が建てられていることの背後には、神のご計画があります。そして、私たち皆を救おうとされる、神の働きがあります。そしてまた、そのような神のみわざに奉仕した多くの先達がおられたからこそ、今の教会、今の私たちがあることを思います。天に召された方々を偲びつつ、神と先達に感謝しながら礼拝を守りたいと思います。

「わたしらしく生きよう 自分をたしかめて 男らしくでもなく 女らしくでもなく ただわたしをつくられた神にこたえる ただわたしらしく生きることで」 これは、「主につくられたわたし」というタイトルが付けられた賛美歌の歌詞です。作詞者は、平良愛香^{たいら あいか}さんという牧師です。この人は、牧師になったのが私と同期で友人でもあるのですが、自分がゲイであることを公言して牧師になった人です。「ゲイ」というのは男性同性愛者のことですが、聖書には同性愛が罪であると読める箇所があり、平良さんも一時期とても悩み苦しみました。でも、しっかり読み直してみると、そうとは言いきれないということが分かってきました。

平良さんは言います。「異性を愛する人であろうと同性を愛する人であろうと、神はすべての人々を祝福しているであり、そうでなくてはおかしい、と僕はそのように考えています。」 同性愛はおかしいとか、男は女を、女は男を好きになるのが当たり前だとかいった考え方は、明らかに間違いであり、そのような偏った考え方によって差別が助長されてきたのです。歴史的にも、キリスト教会がそこに加わっていたこともきっちり認めて、差別をなくしていくために一人一人が考え、そして行動していかなければなりません。

さて、イエス・キリストは非常に人権感覚に鋭い人であったと思うのですが、それは聖書全体を貫いている思想にも深いところで通じています。人権とは何かというと、人間が人間らしく生きる権利で、すべての人が生まれながらにして持っている権利です。それは、すべての人が生命と自由を確保し、幸福に生きる権利を持っているのだということを示しています。そしてそれは、だれにとっても大切なものであり、常に守られなければならないものです。一人一人が、かけがえのない大切な存在として尊重され、守られる社会を共に作っていくという考え方が根底にあります。

では、具体的にどんな権利があるのでしょうか。自由に安全に生きていく権利や、人として平等に扱われる権利は、もっとも基本的なものです。たとえば、安全に安心して暮らしていくための家や、必要な食べ物や水があること、そして、だれもが差別されることなく学び、仕事ができること。これらは私たちが生きていく上で最低限必要なことです。ところが、そういった権利が正当な理由なしに制限されたり、奪われたりすることがあります。これこそが差別です。偏見や先入観などをもとに、特定の人々に不利益をこうむらせたり、不平等な扱いをすることがそれです。

別の言い方をするなら、差別とは自分ではどうしようもない事柄を理由に虐げられることです。例えば、人種や身分、階級、宗教、学歴、国籍、職業、性別、心や体の障害、出身地などによる差別が現実にはあります。私たちは人を差別してはいけないと、少なくとも頭では理解しています。日本国憲法でも平等権が規定されています。平等権というのは差別されない権利のことです。憲法 14 条にこうありま

す。「すべて国民は、法の下に平等であつて、人種、信条、性別、社会的身分または門地により、政治的、経済的または社会的関係において、差別されない。」 信条とは考え方のことであり、門地というのは生まれた家柄のことです。これを見て明らかなように、日本はあらゆる差別を禁止しています。しかし、憲法で「すべての人は差別されない」と保障されているにもかかわらず、現実には多くの人が差別されて辛い思いをさせられています。

さて、今日はヤコブの手紙が示されましたが、2章の冒頭にこう書かれています。「わたしたちの主イエス・キリストを信じながら、人を分け隔てしてはなりません。」 この手紙の著者は、キリスト者が、たとえば礼拝において神を賛美したり、祈りをささげたり、祝福したりといった宗教的な事柄を大事にしている一方で、教会の中で貧しい人につらく当たったり、教会員同士で争って、憎しみ合っているという矛盾を鋭くついています。これこそが、ヤコブの手紙の重要な特徴です。

著者はパウロのように、イエスの十字架がどのような意味を持つか、教会はどうあるべきかといったことを詳しく展開することはあまりしていません。それは、そのような議論の中身よりも、イエス・キリストがどのような神であるのか、あるいは自分たちがどのように神を信じるのかといったことが普段の生活とどう結びついているのかを問題にするからに他なりません。当時の教会の中では、神の国の相続者として選ばれているはずの貧しい人たちを冷たくあしらい、辱めるようなことが行われていました。そしてそのようなことをすることによって神を冒瀆するような金持ちたちを尊重し、本来、平和を生み出すために与えられたはずの知恵を、自分の欲のために用い、教会の中に争いを引き起こす態度は、神に敵対することに他ならないということです。

また、この手紙の著者はパウロが敵対したようないわゆるユダヤ主義者とは異なりますが、律法に従うことが神の意思に適うことであるという、ユダヤ教の信仰理解を引き継いでいます。そのような著者は、人間は神の意思を実行できる存在、神の御旨に適う生き方ができる存在として造られているはずだと言います。にもかかわらずそのような人間が、神に背いた生き方をしてしまうのはなぜなのかを問うています。

それは、人間の内側にある欲望のなせるわざなのだと言います。欲望をあらゆる悪の根源と見なすユダヤ教的な伝統にしたがって、ヤコブの手紙でも、人間の中にある欲望にこそ人間が神から離れてしまう根本的な原因があるのだと主張しているのです。自分のことしか考えない、自分さえよければそれでいい、人のことはどうでもいい、自分のしたいことをして何が悪いんだ。例えばそのような考えに私たちは陥りがちです。しかしそんな風に、自らの欲望に支配された人間は、神から離れて、神の意思よりも、この世の人間本意の価値観に重きを置くようになります。

聖書の言葉に耳を傾けたり、イエスが言われていること、私たちに求められていることが何なのかを聞くことを忘れて、いかにして多くの富を持つか、いかにして高い地位につくか、あるいはいかにして自分だけが神に祝福されるかといったことばかりを追い求めるなら、自然とキリストの道からはずれることになるでしょう。そして、今日の聖書に書かれているように、平気で人を差別するようになってしまうのです。

人が人を差別してしまう理由として考えられるのは、自分さえよければそれでいいという思いと、もう一つは、自分は人よりも優れていると思いたいという意識があるからではないでしょうか。イエスは差別をする人に対して、そしてまた、差別そのものに対して真っ向からたたかいを挑み、差別をなくしていく努力を惜しまなかった人でした。ルカによる福音書4章で、イエスはユダヤ教の会堂で次のよう

な話をしています。「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」

これはまさに「イエスの人権宣言」であると言った人がいましたが、イエス・キリストの福音は、差別され、抑圧されている人々の人権を回復する使命を持っていると言えるでしょう。私たちが、神によって与えられた豊かな命を生きることとイエスの福音に生きるとは同じ意味を持つのです。また、人を差別しないことは「人に憐れみをかける」ことであると言われますが、この「憐れみをかける」という表現は、貧しい人への慈善という狭い意味ではなく、貧しい人や弱い立場に置かれている人に心を配るという意味合いを含んでいます。聖書が言う「憐れみ」というのは、本来、人間が神から受けるものであり、その恵みの分かち合いとして、社会の中で弱い立場に置かれている人に配慮していくことに他なりません。ですから、持てる者が持たない者に対して何かをしてあげるとか恵んであげると言うことでは全くないのです。

イエスの後についてきた多くの人々を見たイエスが、その人々を「深く憐れまれた」という言葉が福音書にあります。これは、はらわたが千切れるような思い、強い共感を意味しています。ですから、「憐れむ」といってもイエスが救世主として人々に何かを恵んであげようと思ったとか、食べ物を分けてあげようと思ったということではありません。分かち合うということを経験できなかった、自分も空腹だったけれども、わずかなパンしかなかったけれども、分け合って食べようと思った。そういうイエスの気持ち、思いを示しています。

イエスがなぜそのような思いに至ったかという、人々もまたお腹を空かせていたからです。弟子たちは「この人たちを家に帰しましょう」と言いましたが、家に帰ったところで食べる物などほとんど無いという人ばかりでした。もしかすると、彼らは以前、イエスに食べ物を分けてくれた人たちかも知れません。イエスはそのような人たちに向かって、わずかしかなければ一緒に食べようやと言われたのです。もっと言うなら、これは「無いものを分かち合う」ということを示していると思います。これこそが愛であり、互いに大切にすることです。

そのようなイエスを信じつつも、私たちは人を分け隔てしたり、差別することがあります。本来はそうなどできないはずなのに、「尊い人」と「卑しい人」に分けて接したりしてしまいます。では、人を差別しないためにどうすればよいのでしょうか？ 私は、知ることがとても大切だと思います。例えば、しょうがいを持っている人、被差別部落に暮らす人、同性愛の人などなど、その人に会って知り合うことによって差別はなくなっていくのです。あるいは、直接出会うことは難しくても、学ぶことができます。

イエス・キリストは、弱い立場に置かれて差別されている人、虐げられている人に出会って、そのような人々のことを知り、行動を起こしました。差別されたままではいけない、抑えつけられたままではだめだと考え、人々を救っていったのです。今日の聖書で言われていることは、神の命を生きるということでもあると思いますが、互いに理解し合い、互いを思い合う生き方へと導かれたいと願います。